

# 普及指導員調査研究報告書

課題名：やまぐちオリジナルリンドウ「西京の夏空」の摘芯による開花遅延

岩国農林水産事務所農業部 担当者氏名：吉賀 千歌子、河村 佳枝

## ＜活動事例の要旨＞

岩国市本郷町（標高194m）において、7月中下旬出荷品種である「西京の夏空」を、草丈20cmごろに摘芯した場合、摘芯した枝からわき芽の発生はほとんど見られなかった。

摘芯した枝が枯れ、副芽が伸長したが、開花時期は慣行区と変わらなかった。

## 1 普及活動の課題・目標

J A山口県岩国統括本部花き部会のリンドウでは、8月上旬出荷（盆出荷）品種は、県外育成の「しなの2号」のみである。そこで、7月中下旬出荷品種であるオリジナルリンドウ「西京の夏空」を摘芯することにより、盆出荷ができないか検討する。

## 2 普及活動の内容

- (1) 使用品種：「西京の夏空」5年目株（2018年定植）
- (2) 調査ほ場：岩国市本郷町（標高194m）F氏ほ場
- (3) 試験方法
  - ア 摘芯方法：草丈20cm頃に最大葉1対残して摘芯
  - イ 株あたり仕立て本数：5本仕立て、10本仕立て
- (4) 調査項目及び方法
  - 草丈、花段数、頂花の開花ステージ、出荷可能本数（2段50cm以上）
  - 各区10株を調査

## 3 普及活動の成果

- ・今回の栽培条件（「西京の夏空」5年目株で、20cmのころ最大展開葉1対残して摘芯）では、摘芯後に発生した側枝を開花枝として収穫することはできなかった。

## 4 今後の普及活動に向けて

- ・摘芯により、枝が枯れ、副芽が動いたため、リンドウの摘芯時期の難しさを痛感した。他産地の情報によると花の着色が確認されてから花を摘除しないと副芽が動くという話もあったため、まず摘芯時期の検討が必要であった。
- ・今回は5年株を使用し、摘芯した枝も細かったことと、芽整理と摘芯を同時に行ったことも、摘芯した枝の枯死と副芽が動いた要因のひとつと考えられる。
- ・摘芯すると1工程増えることになるので、開花遅延操作を行わずとも盆に出荷できる品種の開発が望まれる。



摘芯前の株の様子



摘芯後の株の様子



摘芯2週間後の様子  
わき芽の発生がみられず、枯れかけている



摘芯2週間後の様子  
副芽が伸びて、摘芯した枝は枯れている

# 普及指導員調査研究報告書

課題名：オリジナルユリ球根増殖の取り組み

周南農林水産事務所農業部 担当者氏名：殿河内寿子、斉藤さつき

## <活動事例の要旨>

管内でユリの球根栽培が初めて導入されることから、技術指導と併せて栽培実証を行った。その結果、栽培技術が習得できた一方、除草対策が課題として明確化した。また、ネット栽培技術による省力化を検証した結果、労働時間の削減と労働環境の改善を図ることができた。

### 1 普及活動の課題・目標

山口県では、やまぐちオリジナルユリの生産振興に取り組んでいるが、切り花産地の拡大には球根の増産が急務となっている。周南市のN営農組合は、水田転作作物として、今年度からオリジナルユリの球根生産を開始したことから、栽培技術の実証と、ネット栽培による省力化を検証した。

### 2 普及活動の内容

#### (1) ネット栽培概要

チューリップの球根収穫作業の省力化を目的にオランダで開発された方法で、現在、富山県等で実用化されている。山口県内では、数年前に下関市のユリ球根産地に導入されて以来、より効率的に作業できるよう改善を重ねている。

定植作業は、目が約1センチのポリエチレン製の専用ネットを畝上に広げ、その上に球根の種球となる小球根やリン片をばら撒きする。その上からさらにネットを被せてから覆土する。収穫作業は、上ネットを土ごと引き上げ、下ネット上に残った球根を収穫する。手作業による掘り取りや、ポテトディガーを使った作業よりも楽に収穫できるメリットがある。

#### (2) 栽培概要

- ア ほ場 周南市小松原（N地区） 面積 5a
- イ 定植日 2022年2月25日
- ウ 定植数 小球根：約36kg、芯球：24kg、リン片：約4kg
- エ 品種 「プチロゼ」
- オ 収穫 2022年7月25日（目標10,000球）

#### (3) 調査項目

- ア 生育状況
- イ 収量（球数・サイズ）
- ウ 労働時間

#### (4) 調査結果・考察

##### ア 生育状況調査

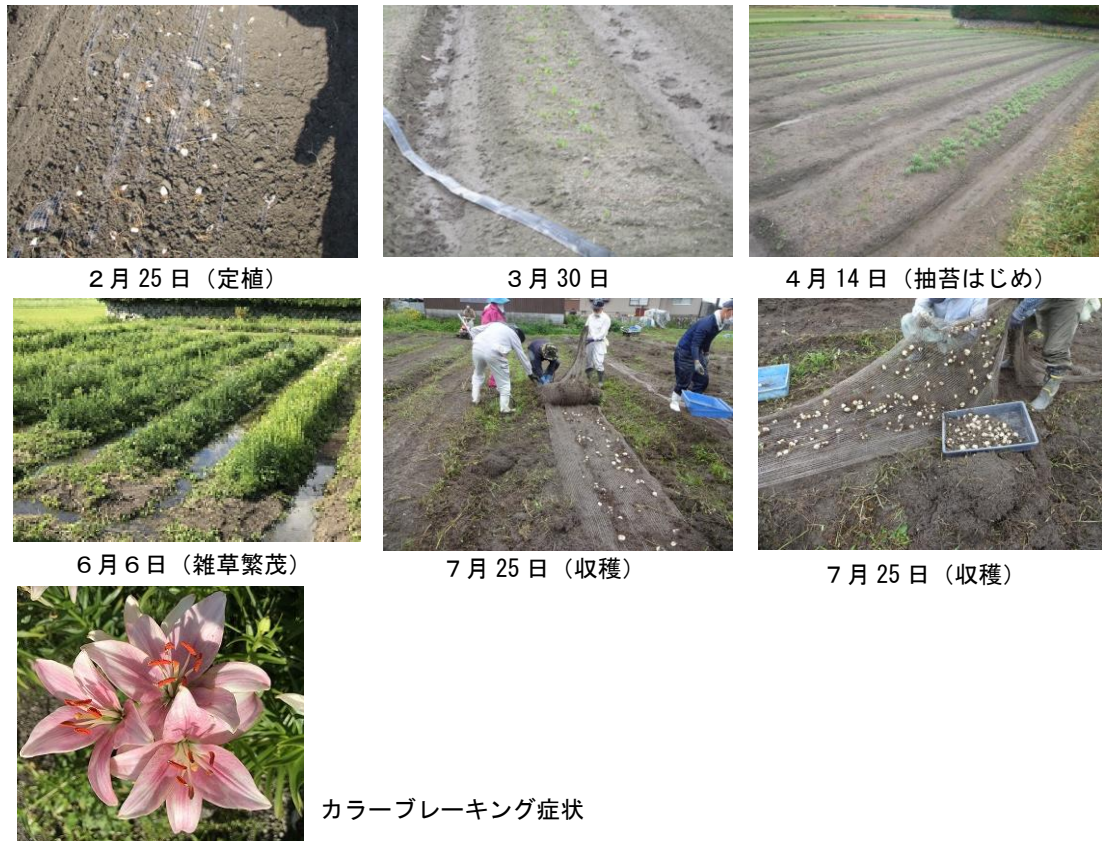
栽培マニュアルどおり除草剤を散布した4月までは、気温が低いこともあり雑草が抑えられていたが、水稻作業が中心となる繁忙期は、手が足りずに除草剤を散布できなかったため、5月以降雑草が繁茂した（表1）。

また、開花期に葉や花の奇形、花卉のカラーブレイキング等、ウイルス症状を確認した。多発した畝はほぼ全てに症状が見られたが、種球から感染していたのか、定植後に拡大したのかは不明（図1）。

表1 除草剤散布実績

実施日	除草剤
2022年2月26日	ナブ乳剤+トレファノサイド乳剤
3月25日	ナブ乳剤+ロロックス
4月15日	セレクト乳剤+カーメックス顆粒水和剤

図1 生育状況



イ 収量調査

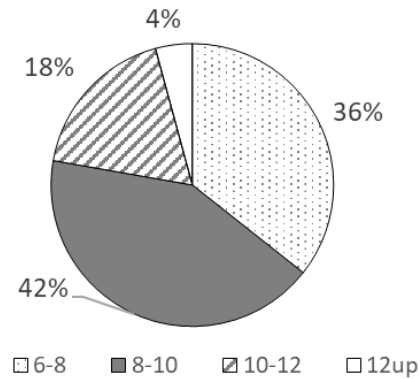
目標収量は、販売できる切り花用（球周8cm以上）が10,262球だったが、実績は5,253球で計画の51.2%だった（表2）。これはウイルス症状が多発した11畝中3畝の収穫を中止したことと、次の増殖の種球となる小さい球根を回収せず、目視で大きめの球根のみ収穫したため取り残しがあったことが考えられる。

また、収穫した球根で、6-8cmと8-10cmの割合が78%と小さい球根が多かったのは、5月以降に雑草が繁茂したため、ユリが雑草の陰となり光合成が制限されたことと、養分が競合したためと考えられる（図2）。

表2 収量調査結果

球周 (cm)	6-8	8-10	10-12	12up	合計 (8cm以上切り花球のみ)
球根 (個)	2,909	3,438	1,471	344	5,253

図2 球周別割合



### ウ 労働時間調査

経営指標がないため、他産地の慣行栽培の実績を参考値として比較した。定植作業時間は10aあたり39時間で、参考値の約2倍であった。これは、慣行栽培には無いネットの敷設作業が大きな要因と考えられる。

収穫作業時間は10aあたり52時間で、参考値の約半分に抑えられた。これは、ネット栽培により効率的に作業が実施できたためと考えられる（表3）。生産者からは、ネットの引き上げに力が要るものの収穫は慣行栽培よりも楽だったとの評価を得た。一方で、ウイルス病が多発した畝はネットを回収するだけで球根は拾わなかったため、作業が簡便に実施されたことが労働時間が短くなった一因とも考えられる。今後さらに調査が必要である。

表3 労働時間調査結果 (10aあたり)

	人数 (人)	時間 (hr)	合計	参考値
定植	6.5	6	39	18
収穫	6.5	8	52	101
合計			91	119

### 3 普及活動の成果

除草剤の適期散布ができず、雑草が繁茂し、球根の品質が低下した。また、土中のネットに大きな雑草の根が絡みつき、収穫をスムーズに行えなかったことから、除草対策の重要性について生産者が認識できた。

ネット栽培については、慣行栽培に比べて定植にかかる労働時間は倍増するが、収穫作業の時間は半減でき、全体では約25%削減できた。特に収穫作業は7月の炎天下で行われるため、時間短縮は熱中症リスクの軽減や労働環境の改善にもつながり、数字以上の効果があると実感された。今後、面積を拡大していくのにネット栽培は有効な技術であると、生産者から高い評価を得られた。

### 4 今後の普及活動に向けて

N営農組合は、今後法人設立を予定しており、法人の経営品目の一つとして収益性を上げていく必要がある。そのためにはネット栽培を導入したうえで、①省力的な除草体系を確立すること、②球根の収量と品質を向上させることが課題である。これらを改善し、県全体のオリジナルユリ振興につながるよう球根の安定生産のための支援を行う。

# 普及指導員調査研究報告書

課題名：畑作物のモグラ対策について

周南農林水産事務所農業部 担当者氏名： 殿河内寿子

## <活動事例の要旨>

モグラ捕獲を実践しその成果を開示し、生産者のモグラ捕獲に対する意欲を高め、被害低減対策として定着させることを目指した。捕獲事例をもとに講習会を開催し捕獲を促したところ、捕獲に成功する生産者が出てきた。



「モグラ塚」

## 1 普及活動の課題・目標

モグラによる農作物被害が問題になっており、特にリンドウほ場ではモグラによる株枯が多く発生し、生産拡大を阻む要因となっている。侵入個体の捕獲以外に実効性のある対策がなく、市販の捕獲機を使って捕獲可能とされるが、実際には捕獲できないことが多く、実施する生産者は少ない。

そこで、市販捕獲機で捕獲を実践し成果を開示することにより、生産者の捕獲への意欲を高め、被害低減対策として定着させることを目指した。



モグラによる  
畦の変形

## 2 普及活動の内容

(1) リンドウほ場におけるモグラ捕獲の実施

- ①実施場所 周南市大潮のリンドウほ場
- ②実施期間 令和4年10月5日～12月10日
- ③実施方法 市販捕獲機による 別添資料参照

(2) 講習会の実施

- ①11月29日 JA周南園芸部会リンドウグループ（捕獲成功前に実施）
- ②12月20日 JA南すおうアスパラガス生産者（捕獲成功後に実施）

## 3 普及活動の成果

(1) 捕獲

作業開始から2か月余り、捕獲機設置開始から50日目（12月8日）に捕獲に成功した。（別添資料・別添講習会資料参照）

(2) 生産者による実践

捕獲成功後にアスパラガスグループで講習会を開催し実践を促したところ、複数の生産者が捕獲に取り組み、成功事例（1件）があった。

## 4 今後の普及活動に向けて

(1) 捕獲について

- ①市販の捕獲機（自作も可能）で初心者でもモグラが捕獲できることが分かった。モグラが常時利用する坑道探しに手間がかかり、捕獲機が避けられるケースも多く、設置場所や設置方法などを変更しながら根気強く取り組む必要がある。

②捕獲には経験的なコツがあると考えられる。根気強く取り組むためには、生産部会や地域での成功事例を蓄積し「アドバイザー」となる人を育成することが望まれる。

(2) 被害防止対策について

①現状では、実効性のある「撃退グッズ」はないこと、一般害虫と同じように侵入するたびに捕獲する必要があることを理解する必要がある。

②モグラ被害は根域のトンネルによる根の乾燥によって起こる。被害防止には、①根域にトンネルを作らせない、すなわちモグラの餌となるミミズや昆虫類を増加させない栽培体系、②トンネルを潰して根の乾燥を防止する対策の検討が必要である。



「生活道」を探するため、苗箱を10枚設置（左）

1か所で繰り返し再生するトンネル「生活道」確認（右）

失敗事例

- ① 捕獲機の横を通過。
- ② 板を入れると、板に沿ってトンネルを掘ることを確認。
- ③ 板に沿って捕獲機を仕掛けるが…
- ④ 上と横に回避された。
- ⑤ 落とし穴の高さ不足でよじ登って逃げた。



## 【畑作物のモグラ対策 別添資料】

### モグラの捕獲方法

（おもしろ生態とかしこい防ぎ方「モグラ」（井上雅央・秋山雅世著）を参照）

#### ★手順1：板きれで生活道を見つける

ほ場内のぼこぼこしたところ（地表近くにモグラの坑道がある）を平らにならし、コンパネ等の板を置く。大きさ、素材は任意。筆者は60cm×90cmのコンパネ7～8枚/10a程度設置。

翌日、板の下に坑道ができていれば埋め戻して元通りに板を置く。翌日も同様にする。3日続けて同じ個所に坑道が復活していれば、それは生活道と考えられる。

#### ★手順2：生活道に捕獲機を仕掛ける

板の下にできた生活道に捕獲機を設置し、上に板を置く。捕獲機は直径5cm程度の筒に、内側にしか動かないベロの付いた捕獲機を使用。市販品でも自作でもよく、金属、竹など素材は問わない。坑道のどちらからモグラが来るかわからないので、筒の両側にベロの付いたものか、片側タイプなら2個を背中合わせにして設置する。翌日には捕獲される。

### ○実際に行った方法と捕獲まで

10月5日にほ場の枕（通路）に水稻の育苗箱（60cm×30cm）に土を入れたものを10枚設置、2～3日おきに状況を確認した。2週間後に繰り返し再生する生活道を確認、10月20日から捕獲を開始した。生活道に市販の筒型捕獲機（金属製、両開き）を設置した。

翌日、捕獲機を直前で回避していることを確認、設置しなおした。その後数日おきに捕獲機を設置しなおしたが、設置翌日には捕獲機の横や上下に新たな坑道を作り逃げられることが続いた。捕獲機メーカーの専門家に相談するなどして、捕獲機の前後の坑道を潰して設置するなど設置方法を工夫したり、薄いプラスチック製の捕獲機を使うなどしたが、捕獲できなかった。ただ、捕獲機そのものを忌避する様子はなく、生活道は利用され続けた。専門家からは「生活道がわかっているならそのうち捕まるはず、あきらめないで。」とのアドバイスをもらい、捕獲を続けた。

12月7日にプラスチック製捕獲機を1か所（2個）に仕掛けたところ、翌8日に捕獲されていた。16回目の設置での捕獲であった。特に変わった仕掛け方をしたわけではなく、捕獲できた理由は不明であった。

他の個体がないか確認のため、同じ坑道に捕獲機を設置したところ、10日に捕獲機横に新たな坑道ができており、別個体がいることが確認された。この後、積雪の多い季節となり、捕獲をいったん終了した。

なお、落とし穴トラップも試みた。モグラはいったん穴に落ちたものの、捕獲容器の深さ不足（25cm）のためよじ登って逃げていた。捕獲には直径30cm深さ30cm以上の捕獲容器を生活道の数cm下に設置するために深さ40cm以上の穴を掘る必要があり、設置に手間がかかる。また、専門家によれば筒型捕獲機と同様にトラップ直前で回避することもあるとのことで、普及性は低いと考えられる。



# 畑地におけるモグラ対策について



令和4年(2022年)12月20日  
周南農林水産事務所農業部

## 1 モグラによる農作物被害

- ・多くはトンネルによる根の乾燥害…100%肉食なので根はかじらない
- ・畦を崩す被害も発生。

## 2 対策 ほ場に侵入したモグラは捕獲するのがよい

- 理由① 有効なモグラ撃退グッズ ⇒ おそらく無い
- 理由② 地下1m以上の穴を掘ることもあり、物理的な障壁を設けるのは困難
- 理由③ モグラ1匹が利用するトンネル網は300㎡から場合によっては5000㎡にもなる。⇒ほ場に被害を与えるモグラは1~数頭の可能性。
- 理由④ 対策費用が安い。市販の捕獲機は1000円前後のものが多い。  
少ない労力で捕獲機の設置可能(1か所5分程度)  
※自分の農地以外で捕獲する場合は許可が必要なので注意

## 3 モグラの捕り方 (詳しくは別添資料)

ステップ1:モグラが毎日使う「恒久的坑道」を地表近くで探す  
モグラのトンネルには繰り返し利用される「恒久的坑道」と一時的に利用する「探餌用坑道」がある。恒久的坑道は普通地下深くに作られるが、条件によっては地表近くにも作られる(生活道)。

ステップ2:生活道に捕獲機を設置、翌日には捕れる。はず…

### 【モグラ初心者による捕獲チャレンジ】鹿野リンドウほ場で10月より実施中

- ・生活道は短期間で発見
- ・しかし、捕獲機の直前で回避され、1か月以上逃げ続けられた。
- ・捕獲機設置し始めて50日目(15回設置)で1匹目捕獲。捕獲機設置継続中

### ◆モグラ獲り経験者や、捕獲機販売業者によれば

- ・簡単に取れる場合もあるが、なかなか取れない奴もいる。個体差?
- ・人間のにおいを警戒することはない。
- ・木の根などの障害物があると、それを避ける。捕獲機も障害物と認識か。
- ・石垣や波板沿いに作られたトンネルで捕獲しやすい。
- ・捕獲機を仕掛けやすいまっすぐなトンネルを作らせるために、細長い板をトンネルに設置し埋めておくとよい。

「あきらめずにチャレンジしてください」とのアドバイスでした。

# 普及指導員調査研究報告書

課題名：リンドウにおける摘芯効果の確認

山口農林水産事務所農業部 担当者氏名：川野祐輔・光永拓司・牛見哲也

## <活動事例の要旨>

- ・リンドウにおいて、収穫量の増加と需要期出荷を目的とした摘心栽培効果を確認した。
- ・試験区株では、早期（3月25日）に摘芯した株は新たな芽が出芽し、慣行区（無摘芯区）と比べ2週間遅れで生育したが、開花期は同時期となった。遅れて（4月22日）摘芯した株は側枝が発達したが、切り花長と花段数が低下したため市場出荷規格を満たす品質とならなかった。
- ・次年度は市場出荷可能な品質の切り花を得られる摘芯条件の解明に取り組む。

## 1 普及活動の課題・目標

山口市で県オリジナル品種を含む複数品種の組み合わせによって5月から10月までリンドウの出荷を行っている。その中でも、特に需要が高いのが盆時期前の8月上旬であり、毎年市場からも多くの出荷を望む声が上がっている。一方、8月上旬頃に開花するオリジナル品種や一般品種も少ないといった点から、需要期を満たすほどの出荷量を確保できていない。このような状況で、リンドウ生産を行う管内法人から、需要期には収穫量を増やす栽培管理を行いたいとの相談があったため、リンドウの出芽期直後に摘芯処理を行うことで、開花期を遅らせ、側枝の発達を促すことで株あたり収穫量の増加が可能か試験を実施した。

## 2 普及活動の内容

- (1) 実施場所 山口市徳地地域（農）D
- (2) 対象品種 市販品種しなの2号（通常7月下旬開花）
- (3) 試験区の構成

試験区	摘芯時期	処理した生育ステージと摘芯位置
試験区1（前半摘芯区）	3月25日	地上部5～8cm程度、上部3cm
試験区2（後半摘芯区）	4月22日	地上部35cm程度、上部8cm

- (4) 調査株数 各20株
- (5) 調査項目 側枝の平均草丈、側枝の平均花段数、開花期※

※開花期は達観調査



摘芯前半（3月25日）



摘芯約2週間（4月6日）



摘芯後半（4月6日）



摘芯2か月後（6月17日）

表1 生育調査結果

摘芯区	側枝の平均草丈	側枝の平均花段数	開花時期
前半摘芯区	-	-	7月下旬
後半摘芯区	60.5cm	1.8段	8月上旬
慣行区	-	-	7月下旬

### 3 普及活動の成果

摘芯することで2週間後から後半摘芯区は側枝の伸長が見られた。

そこで花芽が確認できる7月5日に生育調査を行い、後半摘芯区の側枝の草丈と側枝の花段数、開花時期を調査した。

一方で、前半摘芯区は摘芯した茎から側枝は確認できず、新たな芽が生育しており、慣行区と同じ生育状況となっていたため調査を中止した。

これは前半摘芯区の摘芯する生育ステージが早かったためであると考えられた。後半摘芯区では大きな側枝が得られたものの、市場出荷規格（切り花長70cm、3段）を満たすことができず、市場に出荷することができなかつたため、直売所へ出荷することとなった。

### 4 今後の普及活動に向けて

摘芯により側枝を発生させるためには、処理する生育ステージと摘芯する位置が重要であると思われた。昨年度の摘芯試験の地上部15cm摘芯では草丈が十分に得られなかつたため、前半区では昨年度より早い生育ステージ（地上部5～8cm）での処理を行ったが、芽が若く側枝を形成しなかつた。

一方、後半区ではかなり遅いステージでの処理となったが、摘芯した位置が高く残した節数が多かつたためか大きな側枝が得られたが、花段数3段は得られなかつた。

来年度は地上部10cm程度で摘芯できる生育ステージで摘芯を行い、追肥の量を増やした試験により花段数を確保し市場出荷品質を目指した現地試験を行う。

# 普及指導員調査研究報告書

課題名：オリジナルユリの葉枯れ症対策技術の確立

下関農林事務所農業部 担当者氏名：野村悟治、安良田勉、友廣大輔、山本和美

## <活動事例の要旨>

下関市内では、J A山口県下関花き部会オリジナルユリ専門部によるオリジナルユリの栽培が行われており、県内最大の生産地となっている。

近年、需要の大きい年末出荷向けの作型を中心に、葉焼け症（生理障害）が発生し、切り花品質の低下するケースが散見されている。ユリの葉焼け症の要因としては、水分収支のアンバランスやカルシウム欠乏が上げられていることから、カルシウム資材の葉面散布を実施したところ、慣行栽培と比較して、葉焼け症の発生を低減することができた。

## 1 普及活動の課題・目標

やまぐちオリジナルユリでは、高温期に定植する（年末出荷向け）作型を中心に生理障害（葉焼け症状：葉の先端部がかすり状になる）が発生しているが、葉焼け症は、水分収支のアンバランスやカルシウム欠乏に由来し、球周12cm超の大球利用、高温期の定植や高EC土壌への定植による上根の生育不良や日照条件の大きな変化により、発生が助長されるとされている。

現在、葉焼け症対策として、蒸散抑制のための葉水散布等が取り組まれているが十分とは言えないことから、カルシウム資材の葉面散布による被害軽減を図る。

また、葉焼け症の発生時期の把握と環境モニタリングを活用した発生時の栽培環境を把握する。



## 2 普及活動の内容

### (1) 葉面散布による葉焼け症状の低減効果の確認

カルシウム資材の葉面散布を行い、症状の発生状況を確認した。

#### <耕種概要>

供試品種：やまぐちオリジナル「プチソレイユ」

定植日：令和4年10月4日

収穫期：令和4年12月

栽培方法：コンテナ栽培

施肥管理は、山口オリジナルユリ栽培マニュアルに準拠

#### <調査概要>

調査株数：36株×3区

処理方法：処理区では、令和4年10月31日から11月28日まで、背負式動噴を利用し、カルプラス（500倍）を週1回の葉面散布を実施した。

散布開始時期は、定植球が概ね出芽し、症状が未発の段階とした。

調査方法：葉焼け症の発生状況を目視により、症状の発生株数と程度を確認した。

使用資材：カルプラス（OATアグリオ株式会社、成分：カルシウム 8%（CaOとして11%））

## (2) 葉焼け症の発生環境の把握

管内3か所で、環境モニタリング装置（はかる蔵：リバティータポートジャパン（株）等）を活用し、栽培期間中の環境状況を把握した。

<測定項目>

気温、地温、湿度、日射量、pF値

## 3 普及活動の成果

### (1) カルシウム資材の葉面散布による葉焼け症状の低減効果の確認

出芽揃期（葉焼け症が未発生時）から1週間間隔で葉焼け症の発生状況を調査した。調査にあたっては、症状が見られた株と多発（3葉以上に症状が見られる株）株の2段階で評価した。

調査結果としては、無処理区では38%の発生が見られたが、処理区（カルプラス散布）ではいずれも大幅に発生数が抑制された（表1）。

表1 葉焼け症の発生状況

	発生株の割合	多発株の割合
無処理区	38%	18%
カルプラス処理区	13%	8%

注) 36株分を1区とし、3区の平均値

### (2) 葉焼け症発生時期とその栽培環境の把握

葉焼け症は、芽の伸長期初期から急激に発生し、生育中期以降の新規発生はほとんど見られなくなった（図1）。

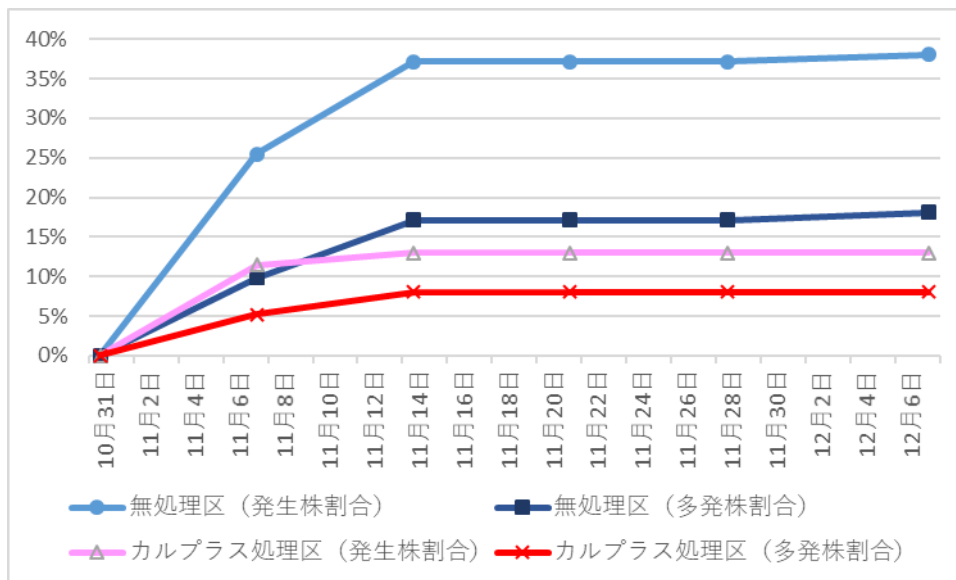


図1 葉焼け症の発生状況

そのため、葉焼け症を誘発する要因の一つとされる急激な環境変化の発生状況を確認したが、萌芽期から伸長期の環境モニタリングデータ（気温、地温、湿度、日射量、pF値）を確認したが、測定値に急激な変動は見られなかった（測定データ省略）。

#### 4 今後の普及活動に向けて

葉焼け症に対してカルシウム資材を予防的に葉面散布することで、大幅に症状を抑制することができるため、生産部会内での研修会を通じ、徹底を図っていく。

また、今回実施した環境モニタリングの結果からは、葉枯れ症の発生を誘因すると考えられるような環境要因が見い出せなかったが、カルシウム資材の葉面散布だけでは、完全に症状の発生を抑制できていないことから栽培環境面からも含めた対応策を引き続き検討していきたい。

# 普及指導員調査研究報告書

課題名：やまぐちオリジナルリンドウの生産拡大

農林総合技術センター農業担い手支援部 就農・技術支援室 : 松井香織、片山正之

## ＜活動事例の要旨＞

出荷率および品質向上対策と集出荷体制を検討し、出荷本数の増加を図るとともに、集落営農法人等を中心に作付け推進を行う。

### 1 普及活動の課題・目標

リンドウ（西京シリーズ）については、品質に優れ全国に誇れる品目となるよう、これまで、需要拡大、担い手の確保・育成、生産体制の強化を進め、集落営農法人や個人生産者に生産が広がっている（H26：133a→ R3:319a）。

しかし、昨年度は集落営農法人の作付け拡大は2割程度にとどまるなど、生産拡大の勢いは停滞しており、さらなる推進を図るために、まずは生産面において出荷率向上に向けた曲がり対策や初期生育の安定化等の技術対策、また、効率的な集出荷体制の確立や、計画出荷に向けた出荷予測情報の共有化等の流通対策に取り組み、集落営農法人等へのさらなる作付け誘導が必要な状況である。

### 2 普及活動の内容

- (1) 品種特性に応じた栽培技術実証
  - ・施肥体系等の実証ほの設置
  - ・新品種「西京の瑞雲」の地域適応性の把握
  - ・栽培マニュアルの見直し
- (2) 計画出荷の実現に向けた出荷体制の整備
  - ・各産地における生育状況や出荷予測の情報共有体制の活用
  - ・共販を核とした、関係者の連携による需給調整と新たな出荷体制の検討
- (3) 集落営農法人等への推進
  - ・既存生産法人の現状把握や課題の整理による推進方法の検討
  - ・経営指標や推進チラシの活用による新規栽培者の確保

### 3 普及活動の成果

- (1) 品種特性に応じた栽培技術実証
  - ・栽培マニュアルを見直し、作業時期の追加や作業内容を品種ごとに説明した。また重点作業についてはチェックシートを別途作成して適期作業の徹底を図った。その結果、株あたり出荷本数が2.5本から3.1本に増加した。
  - ・省力化を目的とした実証ほを設置。除草剤による除草作業の削減や、マシン目マルチの導入による定植作業の削減に取り組んだ。取組状況は研修会等で報告し、生産者および関係機関で共有した。

- ・新品種「西京の瑞雲」の現地実証ほを県内3か所に設置して現地調査を実施した。切花品質は草丈80cm以上、花段数4段以上であり、花市場での評価も高く、出荷時期の拡大につながる品種と考えられる。山口県主要農作物・園芸作物奨励品種に決定し、令和5年度から種苗販売が開始される。

#### (2) 計画出荷の実現に向けた出荷体制の整備

- ・各産地における生育状況や出荷予測の情報共有体制を構築し、約1か月先の出荷予測と栽培管理のポイントを関係者で共有。出荷情報の早期発信による計画出荷に取り組んだ。また、生育状況とともに必要な管理を共有し、出荷本数の増加に向けて取り組んだ。
- ・農事組合法人が地域のリンドウの共選を行う出荷体制について試行し、6～8月にかけて、合計16回の集荷・販売を実施した。

#### (3) 集落営農法人等への推進

- ・作型別の経営指標や共選共販に取り組んだ場合のシミュレーション等を検討し、それにより、既存導入法人の現状や課題整理、推進方法の検討を行った。

### 4 今後の普及活動に向けて

- 栽培技術の向上
  - ・品質向上・省力化対策（施肥体系、防除体系）の実証
  - ・新品種「西京の瑞雲」の地域適応性の把握
  - ・生存株率増加や株あたり出荷本数3.5本を達成できるように、栽培マニュアルを活用したモデルほ場を設置
- 計画出荷の実現に向けた出荷体制の検討
  - ・各産地における生育状況と出荷予測の情報共有体制の活用
  - ・関係者の連携による需給調整と新たな出荷体制の検討
- 産地拡大
  - ・既存法人等の現状把握や課題整理
  - ・経営指標や推進チラシ等の活用による新規栽培者の確保